



薬友会会長ご挨拶

薬友会会長 萬年 成泰 (9期)

今回の薬友会だよりは、前年度のものが昨年11月30日に発行されたため、期間が短くなっておりますが、3月30日に4年に一度の薬友会総会を開催しました。そこで、昨年度に制定された薬友会賞のうち、長年にわたり薬友会の発展のためにつくされた方を対象とする薬友会アワード(功労賞)の第1回の表彰を行いました。審議は理事会が行い、薬友会そのものの創設に関わられました1期の林 信一様と2期の近藤雅臣様を選出いたしました。その大きなご功績については本誌の9ページに紹介されています。また、今年度は役員改選の年でもありましたが、二つ改革を行いました。まず副会長に北澤恵子さんを委嘱しました。北澤さんは、ホームページの作製、運営で大きな役割を果たしてくださいました。薬学部は女性の比率が他学部よりはるかに多いにも関わらず、役員にはこれまで女性の方々が少なかったのですがこれを機に女性会員がさらにご参加くださることを期待しております。今一つは、年齢分布のひずみを改めるために多くの若い世代の会員に理事になっていただきました。これらを通じこれから薬友会の活性がさらに上がるものと信じております。また昨年、新入生も会員になっていただくと申しましたが、今年度よりそれを具体化し、保護者の方々に、その趣旨にご賛同とご協力をお願いいたしました。

昨今、世間は色々な意味で騒がしくなって参りましたが、会員の皆様にはますますご健勝にご活躍されますことを願っております。

以 上

<薬友会ホームページ更新情報を配信します>

薬友会ホームページはおおむね月1回程度更新しています。

ご希望の方に更新情報をお送りしますので、下記の要領にて薬友会事務局へメールをお送りください。

メール宛先	薬友会事務局 yakuyukai@phs.osaka-u.ac.jp
タイトル(件名)	HP 更新情報の配信申込み
メール本文	「氏名」「期数」「配信希望先メールアドレス」



薬学研究科長・薬学部長
薬友会幹事長

堤 康央 (39期)

薬友会会員の皆さまにおかれましては、益々ご清祥のことと存じます。平成26年度の始まりにあたり、大阪大学薬学部・薬学研究科（「阪大薬学丸」）の構成員を代表し、ご挨拶とご報告を申し上げます。

本年は新たに、学部学生として第66期89名（薬学科：29名、薬科学科：60名）を、大学院生として院66期94名（創成薬学専攻博士前期課程：73名、同後期課程：21名）を迎えました。ヒトの健康確保を考究する「薬学研究教育」領域で、世界拠点を目指し、『5年後には国内外でOnly Oneに、10年後にはNumber Oneに！』を合い言葉として、「阪大薬学丸」の教職員・学生が一丸となって挑戦できればと願っております。薬友会会員の皆さまには、より一層のご支援を賜りたく、お願いを申し上げる次第です。それでは駆け足で、近況を報告させていただきます。

昨年秋より何度かのやりとりがあり、ようやく3月末に、文科省より、「阪大薬学丸」のミッションの再定義（案）が届きました。この内容をかいつまんでご報告しますと、「阪大薬学丸」の教育・人材育成面でのミッション（案）は、(1) 医薬品開発の入口から出口において、国際的舞台で先導的に活躍できる、「創薬臨床力」に優れた人材を育成すること（薬学科・医療薬学専攻）、(2) 「創薬基盤技術力」を磨き上げ、ライフサイエンスの最先端でグローバルに活躍できる、創薬基礎研究者を育成すること（薬科学科・創成薬学専攻）となっています。一方で、研究面でのミッション（案）は、(3) 産学官連携や他の研究機関・研究分野等と連携した研究をグローバルに推進することにより、世界と戦える「ものづくり（創薬）」の中核を担い、我が国発の革新的な医薬品の創出や、医療・生命科学等の発展に貢献することとなっております。研究型大学（RU）としての大阪大学の一員として、「阪大薬学丸」が位置づけられ、世界をリードする薬学研究教育拠点として、大きな期待を寄せて頂いたものと思っております。これで一安心ではなく、逆に、その名に相応しい実績

（研究・教育・人材育成・グローバル化）を求められることにもなりますので、三つのキーワードを胸に（「創薬基盤技術力」・「創薬臨床力」・「ものづくり（創薬）」）、気持ちを新たにしつつ、全力を尽くしたいと念じております。

さて現在、薬学部1号館（本館）の耐震改修工事が本格化しております。皆さまには、大変なご不便をお掛けしておりますが、来年3月末にリニューアルする「阪大薬学丸」にご期待頂けましたら幸いです。なお、来年5月頃を目処に、24期の藤岡弘道先生＜分子合成化学分野（合成）＞と八木清仁先生＜生体機能分子化学分野（工学）＞を中心に、竣工祝賀会を企画致しておりますので、是非、ご来駕賜りますようお願い申し上げます。詳細は、追ってご案内申し上げます。

一方、研究面では、内閣府、三省・三独法を中心とした日本版NIH；独立行政法人日本医療研究開発機構（仮称）が、遅くとも平成27年4月から動き出すなど、アカデミア創薬への期待がますます高まっております。そのため、我々アカデミアへの責務が大きくなると共に、まさに、ビック・チャンスが到来しようとしています。学問の追究、サイエンスの考究、人材育成など、アカデミアの本質をしっかりと見極め、担保しつつ、波に乗ることができればと思っております。また、21期の小林資正先生＜天然物化学分野（生薬）＞を組織委員長として、平成27年3月に、日本薬学会第135年会を神戸で開催することになっております。開催に際しては、神戸学院大学および兵庫医療大学の薬友会メンバーの先生方に大きなご支援を賜っております。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。

最後に、言わずもがなではありますが、諸先輩方が築きあげてこられた伝統と実績を大切にしながら、薬学らしい、しかも阪大らしい、『研究教育と人材育成・輩出』に全力を尽くす所存であります。この「阪大薬学丸」らしさを高め、今後さらに発展していくためには、薬友会・卒業生の諸先輩方との連携が不可欠です。より一層の縦横の関係強化と、ご指導・ご鞭撻を宜しくお願い申し上げ、年度始めのご挨拶にかえさせていただきます。

平成26年4月吉日

16 期同窓会

阪大薬学部 16 期のクラス会が平成 25 年年 10 月 26 日、梅田サウスゲートタワービル 16 階「ロドス」にて例年のとおり開かれました。この年亡くなった大橋さん、岩崎さんへの黙祷に始まり両氏の思い出を語りまた各々の近況報告をしました。

出席者は前列左より、岩田（向井）、八田（栄）、山中（中山）すみえ、青山（堀）、岡上（谷口）、大橋（中川）、辻（植岡）、山中、米虫（藤田）、三宅

後列左より又野（川原）、能勢（川本）、山田（前田）、細見（杉浦）、北中、大藪、岡本、植木、大江、山田（山崎）、真野、小野、原田 敬称略 の 23 名でした。



17 期同窓会

2013 年 6 月 1 日～2 日 17 期万葉を愛する会 瀬戸内周遊の旅

万葉を愛する 17 期の有志は毎年万葉の旅を行っているが、6 月 1 日～2 日、参加者 9 名は 3 台の車に分乗し、兵庫・岡山・香川・徳島を巡る「人麻呂と赤人の世界」に旅立った。

印南野（兵庫県加古郡稲美町国安）：

☆名ぐわしき 印南の海の 沖つ波 千重に隠りぬ 大和島根は（万葉 303）
柿本人麻呂が公務出張の旅で詠んだ歌の舞台、「印南（稲美）国原」は早くから開けた所である。稲美中央公園万葉の森で、センダンやあざさなど健気に咲く万葉の花々に感動した。

響灘（兵庫県高砂市高砂町向島）：

☆昨日こそ 舟出はせしか いさなとり 比治奇の灘を 今日見つるかも
（万葉 3893）

高砂海浜公園は美しい松林だった。古くは加古川の河口付近の瀬戸内海を響灘という。大伴旅人が大宰府赴任に従駕する家来達は「昨日大阪を出て今日は響灘を過ぎる」と歌う。もう奈良の都が恋しくなったのであろうか。

室津（兵庫県たつの市御津町室津）：

☆玉藻刈る 辛荷の島に 鳥廻する 鵜にしもあれや 家思はざらむ（万葉 943）

山部赤人も公務出張に寄港した室津は古来より天然の良港。藻振鼻に歌碑を訪ねる。続く金ヶ崎のホテル万葉岬では犬養孝先生書の歌碑に迎えられた。その夜の宿では鱈のしゃぶしゃぶに舌鼓を打ち、ライトアップされた瀬戸大橋を見つ湯につかる。

沙弥島（香川県坂出市沙弥島）：

☆妻もあらば 摘みて食べまし 狭岑の山 野の上のうはぎ 過ぎにけらずや（万葉 221）
磯に寄せる波音を聞き、柿本人麻呂の鎮魂歌の碑を見ていると、当時の旅の困難が思い遣られた。

屋島（香川県高松市屋島）：源平合戦の海に、那須与一の雄姿をしばし思い浮かべる。

阿波・鳴門の渦潮を車窓から覗いた後、明石大橋を渡って 2 日間・600 キロの旅を終えた。

（西村 和夫）



2013 年度版の薬友会名簿ができました！卒業生への配布を始めました。

【2013 年度版の薬友会名簿お申し込み方法】

昨年、「薬友会だより」に同封した名簿注文用の振込用紙をご利用ください。お手元にお持ちでない方は、卒業年度・氏名・フリガナ・郵便番号・住所・電話番号および、「2013 年度名簿希望」と明記の上、郵便局備え付けの振込用紙にてお申し込みください。お振り込みを確認後に、名簿を発送します。

加入者番号：00900-8-7509

加入者名：大阪大学薬友会

18 期同窓会

2014年4月13日開催

今年も無事同窓会を開催させて頂きました。参加者の皆様ありがとうございました。

昭和22年生まれが主体で、団塊世代の先頭を切ってそれなりに日本のために頑張ってきたと勝手に自負しております。65歳を超え仕事から離れる方が多くなって来ておりますが、スナップ写真を見るとまだまだ肌艶も良く、とても活動的です。

同窓生の一人はお寺の住職で、仕事の傍ら美術品の研究に没頭し、初山滋さんの貴重な初版本をゲット。

離島で薬剤師の仕事に今も元気に従事しておられる方。

大学で笑いと健康に関する研究をしておられる方。

何故か日本中のマンホールを見に行かれる方、念願かなって遂に『デザインマンホール100選』というタイトルで初出版されました。因みに最初に印刷した第一刷は完売だそうです。この仕事の切掛けは『マチカネワニ』聞かれた事ございませんか。

1964年(昭和39年)豊中市待兼山町の大阪大学新校舎建設現場から45万年前のワニの化石が発掘されました。このワニも何とマンホールのふたに描かれているそうです。(書籍を参照ください。)この縁でこのプロジェクトがスタートを切ったとの事でした。

何時までも元気で、自由な時間を楽しみたいと思います。

阪大薬学部先輩諸氏、後輩諸君よろしくお祈りします。

機会があれば皆様とも交流させて頂きたいと思います。

この原稿を作成後、我々の同級生である『掛樋一晃氏(かけひ・かずあき=近畿大理事・副学長、分析化学)5月28日、間質性肺炎のため死去、66歳』の報に接しました。

まだ人生これからと言う時に至極残念だったのではないのでしょうか。心からご冥福をお祈り申し上げます。

(北川)



22 期同窓会

卒業後40年の22期同窓会

平成26年5月18日(日)大安吉日、卒業後40年を迎えた22期記念同窓会を、神戸戸りで賑わう中「ポートピアホテル」にて開催しました。集合時間の正午には全員がそろい、シャンパンにて再会を祝して乾杯したのち、宴会がスタート。お腹に少し食べ物が入った頃を見計らい、久しぶりに会う懐かしい面々のお名前を思い出す目的で、全員が自己紹介(近況報告)をしました。その後、記念の写真撮影。次回同窓会(3年後)の幹事(松永君+α)を決め、再会の約束をして散会しました。

参加者は、前列左より春木、香月、小林、池西、河合、田中、松永、今堀、清川、田房、平尾(旧姓辻本)、橋村(浅井)、2列目左より坂本(高木)、平井(菅原)、中井(下山)、修理(武野)、天満(小野)、田房(佐伯)、植田(守本)、紀井、若井(西岡)、吉原(広瀬)、垣内、松原、尾崎(前田)、3列目左より井上(平松)、黒田(堀木)、竹本(水野)、中山(木崎)、藤井(佐藤)、原田、中川(土師)、中長(藤原)、原(若野)、四橋(廣瀬)、平井(田村)、宮脇(真鍋)以上37名。

(幹事：河合 裕一)



27 期同窓会

製薬化学科27期生同窓会の開催

2013年9月29日(日)、大阪大学中之島センターの9階交流サロン(SALON DE L'AMICAL)で、製薬化学科27期生の同窓会を開催しました。幹事は高木さん、佐藤さん(旧姓：多胡さん)、田邊さん(旧姓：吉村さん)の3人です。参加者は13名でした。少しですが前回よりも参加人数が増えました。参加者の内訳は男性5人、女性8人、地元大阪府は8人、京都府1人、奈良県1人、群馬県1人、神奈川県1人、富山県1人、前回に引き続き遠くから参加して下さった方もいました。1979年に卒業後、30年以上経って初めてお会いできた同窓生もいて、とても懐かしかったです。

私、池淵(旧姓：古澤)以外は、大学、製薬会社、薬局、病院やクリニックで仕事をされており、みなさん、それぞれの場所で同じように頑張っているんだなあと思いました。

食事は立食形式で、おしゃべりの輪を開いたり閉じたりしながら、あちこちでおしゃべりの花を咲かせました。口々に言われるのは、「あと数年で定年退職だけれど、余力を残して仕事を退き、あとはゆっくり過ごしたいなあ」ということでした。

今回の幹事さんも決まりましたので、次は還暦(60歳)ぐらい(同期だけれど、それぞれ年齢が違いますので)にアラフォーならぬ「アラ還(あらかん)」で開きましようということを決めて、同窓会はお開きになりました。楽しいひとときでした。またお会いしましょう。そして、今回、来れなかった人も次回はぜひお越しください。

(文責：池淵佐知子)





篠田 純男 10期（衛生）（岡山大学インド感染症共同研究センター センター長）

1962年に薬学部を卒業後、大学院、微研助手を経て、岡山大学薬学部で34年在職して定年退職、その後岡山理科大学に7年、そして未だに標記のポストにあり、大学ばかりに52年間籍を置いて来ました。

学生時代はビタミンB₁に関する研究を行って学位を得ましたが、微研で腸炎ビブリオ発見者の藤野恒三郎先生の教えを受け、以後は病原微生物の教育・研究の道を歩んできました。しかし、ビタミン研究で得た知識・技術も随所で活かされていると思います。

岡大時代にJICA事業等でインド・コルカタのコレラ腸疾患研究所NICEDを頻繁に訪れていたため、文科省の国際新興感染症研究ネットワークが始まった際にNICEDに岡大拠点を置くことを申請して認められ、理科大退職後に岡大拠点のセンター長として赴任しました。機会があれば訪れてください。

なお、阪大は微研が中心となってタイに同様な研究拠点を置いています。



堀江 秀樹 院29期（工学）（（独）農業・食品産業技術総合研究機構 茶品質・機能性研究グループ長）

1983年に前期課程修了後、ずっと農水省傘下の試験研究機関で仕事しております。現在は農研機構野菜茶業研究所において、日本のお茶を国内外の人に楽しんでもらうための研究を行い、現役で分析機器などいじっております。その前は、野菜のおいしさを伝えるための研究を行い、内需拡大を図っていたのですが、野菜も茶も国内生産量は右肩下がり。人も予算も削られ続けています。（健康にいい野菜や茶を国民が多く摂取するようになると、クスリ屋さんのお仕事が減るんじゃないかと遠慮しているわけではないのですが。）「医食同源」などとも言われます。皆様方の若い創造力が、日本の農業や和食文化の再生にも結びつくことを願っております。



王 維奇 院41期（生薬）（住友化学株式会社健康・農業関連事業研究所 主席研究員）

1992年10月日本文部省国費留学生として来日し（生薬、北川勲先生）、1996年に博士後期課程（天然物化学、小林資正先生）を終了後、さらに3年近く小林先生の研究室で合成研究を継続しました。1999年に旧住化ファインケム（株）に入社、2004年に会社の吸収合併により現職に至っております。入社以来、数々の医薬化学品の工業化製法の探索研究及びパイロット生産に携わって、研究開発と社会貢献の両方を経験しております。近年、中国やインドなどの経済発展により医薬化学品ビジネス環境は大きく変わっており、“Change and innovation”の意識をもって研究活動に励んでおります。一方、生活面では、来日20年余り、日本（大阪）は第二の故郷と思いつつ、休日には小学校野球のボランティア活動などに参加させてもらって、地元の方々との交流を深めております。



鈴木 亮 院44期（薬剤）（University of Virginia, Cardiovascular Research Center）

2001年に博士後期課程（薬理学分野）を修了後、東レ（株）で3年間医薬品の研究に従事し、2004年に帝京大学薬学部生物薬理学教室の助手になりました。その後、助教、講師を経て、帝京大学薬学部の相模湖キャンパスから板橋キャンパスへの移転のタイミングで准教授となりました。現在は、帝京大学から1年間の休職期間をいただきまして、米国バージニア州シャーロッツビルにあるUniversity of Virginia, Cardiovascular Research Centerで超音波を利用したドラッグデリバリーシステムに関する研究に従事しています。英語に不自由しつつも、新しい環境を楽しんでおります。せっかくいただいた機会なので、研究およびアメリカ文化を堪能したいと思っております。



久保 大空 52期（合成）（ロート製薬株式会社）

私は博士後期課程を修了後、博士研究員として米国フロリダ州にあるScripps Florida研究所（Prof. Glenn C. Micalizio）に留学し、天然物の全合成研究を行っていました。アメリカでの生活は慣れるまで悪戦苦闘の日々でしたが、異国で一人悩み、考え、行動し自分の道を開いていくという非常にエキサイティングな経験ができました。このような経験ができたのも、先生方や周りの人達のサポートがあったからこそだと感謝しております。留学中縁あってロート製薬に入社することになり、現在は京都の木津川市にあるリサーチビレッジ京都という研究所で、化粧品や医薬品の素材開発に関わる研究を行っております。喜ばしいことに同期入社の仲間達にも恵まれ、彼らの個性あふれる人間性に刺激を受けながら充実した研究生活を送っております。



村田 紘子 53期（物化）株式会社アインファーマシーズ

2007年に薬局に就職しました。薬剤師免許取得から2年経過していたという事もあり、悪戦苦闘の毎日でした。知識の不足はもちろん、患者様との接し方の難しさ、方言の壁。多くの困難がありましたが、石川・京都・愛知・東京とさまざまな地域でたくさんの患者様や上司、同僚と接し、成長させていただきました。そして入社から早7年、今では薬局長として店舗を任せてもらっています。同期の大半が製薬会社に就職するなか、薬局への就職ということで色々な迷いや不安がありましたが、今では医療人として患者さまに直に接し、微力ながらサポートをさせていただくことに大きなやりがいを感じています。今後の超高齢化の時代を迎えるにあたり、在宅医療等に力を入れさらに活躍の場を広げていければと思っています。



池田 和哉 54 期（薬理）（第一三共株式会社）

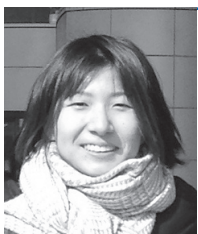
2005 年から 9 年間、神経薬理学分野でお世話になり、2011 年に博士後期課程を修了しました。在学中は主にミトコンドリアの研究に携わり、目を閉じたらミトコンドリアの染色像が浮かび上がるぐらい細胞と向き合った学生生活でした。卒業後は第一三共株式会社に入社し、循環代謝研究所に所属しています。会社に入ってから学生時代の研究とは一転、主に動物実験メインの循環器研究に携わり、マウス・ラットだけでなくイヌやサルまで扱うようになりました。近年は、従来の方法での創薬が可能なターゲットが枯渇しつつある一方、安全性のハードルも上がり、創薬がますます難しくなっていると言われています。そんな中、3 年間創薬研究に携わり、薬をつくることの難しさを痛感する日々ですが、上司や先輩、同僚に助けられながら、なんとか挫けることなく仕事をしています。



山崎 広之 院 55 期（薬情）（北里大学薬学部情報薬学部門）

私は、2009 年大阪大学薬学研究科博士前期課程を修了し、2010 年大阪大学薬学研究科博士後期課程中退後、現在は北里大学薬学部情報薬学部門で助教を務めております。私の研究室では、統計解析やケモインフォマティクスといった創薬に関する研究を行っています。また、学生支援として e-learning システムの構築などにも携わり微力ながら、よりよい教育のために励んでいます。

教育職に就いて思うのは、まず研究と教育を両立するというの大変さを痛感いたしましたこと。そして未熟者であった私を指導していただいた高木先生始め、研究室の先生方に大変苦勞をかけていたのだと改めて実感いたしました。私も先生方に追いつけるよう日々研鑽を積んで参りたいと思います。



矢原 愛子 院 56 期（薬化）（塩野義製薬株式会社医薬研究センター）

私は 2013 年に生物有機化学分野にて博士後期課程を修了し、現在塩野義製薬株式会社 医薬研究センターにて新たな創薬モダリティの開発を目指した研究を行っています。低分子化合物と相補関係となる創薬モダリティの開発には、学生時代親しんだ有機化学以外にも幅広い知識に基づくアイデアが不可欠であり、厳しくも楽しい研究と勉強の毎日を送っています。

入社からの 1 年間は文字通りあっと言う間に過ぎ、入社当時に思い描いた目標の姿にはまだまだほど遠いのですが、在学中、諸先生方に指導していただいた経験を糧に七転び八起きの精神で精進して行きたいと思います。よい新薬をできる限り早く患者さんへ届けられるよう邁進していく所存です。



荒木 良太 56 期（複合）（摂南大学薬学部複合薬物解析学研究室 助教）

私は、松田敏夫先生のご指導の下、2013 年 3 月に博士後期課程を修了し、同年 4 月に摂南大学薬学部生薬学研究室の助教に着任致しました。2014 年 4 月より研究室名を複合薬物解析学と改め、これまでの生薬学を基盤とした「精神機能に作用する天然物由来化合物の探索」に加えて、「精神疾患発症の分子基盤解析」をテーマとした研究をスタート致しました。

さて先日、第 99 回薬剤師国家試験の合格発表がありました。今回は難易度が高くなったようで、合格率は例年に比べてかなり低い水準でした。今後はこれまで以上に、どのようにして研究と教育を両立させていくかが私立薬学部における今後の大きな課題であると感じております。

まだまだ若輩者ではございますが、できる限り、研究者、教育者として薬学の世界に貢献していきたいと考えております。今後とも御指導御鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。



山下 朋美 56 期（薬効）（大日本住友製薬）

2013 年に臨床薬効解析学分野、博士後期課程を修了後、大日本住友製薬で精神疾患の創薬研究に携わっています。大学時代は心疾患の研究に従事しておりましたので、バックグラウンドの異なる中枢神経系領域の研究に、初めは戸惑いや不安もありました。しかし、いざ研究をスタートしてみると、大学時代に学んだサイエンスが十分に活かせ、そして研究室配属された当時のように新鮮な気持ちで研究に向き合うことができ、創薬研究の面白さを実感する日々です。もちろん困難は多くありますが、様々な分野の専門家と協力しながら創薬を進めていける、とてもやりがいのある環境です。

昨年度はあっと言う間に駆け抜けた 1 年でしたが、さらに内容の濃い充実した研究を行い創薬に貢献できるよう、全力で挑戦していきたいと思っています。



吉田 徳幸 56 期（毒性）（大阪大学大学院薬学研究科附属創薬センター創薬臨床研究推進ユニット 核酸医薬評価科学プロジェクト 特任助教）

私は、堤 康央先生（毒性学分野・教授 / 大学院薬学研究科長・薬学部長：39 期）に御指導賜り、平成 25 年 3 月に博士後期課程を修了しました。平成 24 年 9 月より小比賀 聡先生（生物有機化学分野・教授 / 評議員、附属創薬センター長：38 期）のもと、革新的医薬品・医療機器・再生医療製品実用化促進事業に従事させて頂いており、現在、出向先の国立医薬品食品衛生研究所において、核酸医薬品の品質・安全性の評価に関するレギュラトリーサイエンスを推進しております。現在の研究は、将来的に核酸医薬品の規制に直結するものであり、非常に大きなやりがいと使命感を持って取り組んでおります。今後も大阪大学薬学研究科から発信される核酸医薬品に微力ながら貢献できるよう、粉骨砕身、努力して参りたい所存であります。打たれ強いことだけが取り柄ですので、諸先生方におかれましては、是非とも、厳しくご指導御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

**小林 亮広 57 期（製造）（信越化学工業株式会社シリコン電子材料研究所）**

私は 2011 年に薬品製造化学分野において博士前期課程を修了し、現在は信越化学工業株式会社 シリコン電子材料研究所にてシリコンオイルの応用研究を行っています。シリコンは、ケイ素と酸素が交互に結びついたシロキサン結合を基本構造とし、さらに有機基が結合した天然には存在しない高分子材料です。また、オイル、ゲル、ゴム、レジンなど様々な形態があり、私はシリコンオイルの表面張力および界面張力が低い特性を活かした、シリコン系消泡剤の研究に携わっています。低分子化合物を研究対象としていた学生時代とは異なり、現在は高分子化合物が対象ですが、薬品製造化学時代の「天然物の全合成研究」を通して得た知識・技術等が日々の研究で大いに役立っています。最後になりましたが、薬学研究科の益々のご発展を祈念し、近況報告とさせていただきます。

**山本健太郎 57 期（分析）（興和株式会社医薬事業部名古屋工場品質管理課）**

私は 2011 年に博士前期課程を卒業後、興和株式会社に入社し 4 年目を迎えました。現在は、品質管理課の原料グループに所属し、医薬品の原料受入試験の他、様々なバリデーションや各国の法規制への対応さらに海外への申請資料作成等と多岐の業務に携わっています。学生時代の研究という新しいものを生み出すのではなく、厳しくなる一方の規制に準拠し同じ品質の医薬品を作り続けるという難しさを日々感じております。また、英会話に通ったり、草野球やトレッキングをはじめたりと、仕事以外にも新しい刺激に触れて、充実した日々を過ごしております。今後も、高品質の医薬品を患者様に届けられる様に、精進していききたいと思います。

**金田 洋和 58 期（応環）（アストラゼネカ株式会社）**

2012 年 3 月に博士前期課程を修了し、アストラゼネカ株式会社に入社して 2 年が経ちました。私は現在、モニターとして新薬の開発に携わっています。週に 1 回程度は病院に訪問し、Dr. や治験関係者と協議しながら問題を解決しています。モニターは、社内・社外問わず様々な人々と協力しながら治験を進める仕事です。大学院の共同研究から学んだ、1 つの目標を達成するためのチームワーク構築方法、学会でのプレゼン経験から学んだ、意見の伝え方は仕事を進める上で非常に役立っています。現在はクリニックから大学病院まで様々な施設を担当しており『新薬をいち早く患者様の元に届ける』という目標を忘れることなく、日々楽しく働いています。

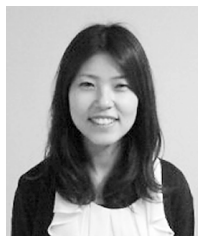
**仲井 友子 58 期（蛋白）（独立行政法人医薬品医療機器総合機構）**

私は 2012 年 3 月に薬学部薬学科を卒業し、現在は医薬品の承認審査に携わっています。

承認審査では、日々難しい判断が求められますが、有効で安全な薬を一日でも早く患者さんに届けるために、審査チームが一丸となって業務に取り組んでいます。日々の業務では、審査チームのメンバーを始め、申請企業や医師、研究者の方々など、様々な立場の人と関わりながらお仕事させていただくことが多く、難しいと思う反面、この仕事が面白いと感じるところでもあります。そして、担当した品目が承認されて医療現場に届けられたときが、何よりもやりがいを感じる瞬間です。未熟な面も多々ありますが、今後もチームの一員として力を尽くしていきたいと思っています。

58 期（生化）

2012 年 3 月に博士前期課程を修了し、早くも丸 2 年が経ちました。入社して私が配属されたのは、中枢神経領域の薬理評価を担当する部署でした。大学院時代には *in vitro* の研究を中心に担当していた私にとっては、戸惑うことが多かった 2 年間でした。しかし新しく習得した技術・考え方と、今まで習得してきたものを融合させて研究を進めることができている、非常にやりがいのある環境です。また 2 年目から外部との共同研究も担当しており、刺激的な毎日を送っています。創薬研究は長い時間がかかり成果がみえず苦しいときもありますが、薬を創るという夢を追いかけて今後も努力したいと思います。

**末田 佳織 59 期（微生物）（第一三共プロファーマ株式会社）**

私は 2013 年 3 月に細胞生理学分野にて修士課程を修了しました。現在は潮風の香る湘南で治験薬の分析業務に携わっています。私は特に治験薬出荷の可否を判定する上で必要となる品質データや安定性を保証するデータの取得を行っており、HPLC や紫外可視分光光度計等の分析機器を用いた試験を担当しています。大学時代は生物系の研究をしていたこともあって、入社当初は分析についての知識や経験が足りず、特有の繊細な操作に悪戦苦闘していましたが、今では多くの試験を担当し「高品質な治験薬の安定供給に貢献している」と自信を持てるまでに成長しました。まだまだ学ぶことは多くありますが、湘南の風に勢いを得て精進したいと思います。

**前川 裕美 60 期（療薬）（アルカ株式会社）**

私は 2014 年 3 月に大阪大学薬学部薬学科を卒業し、現在は大阪府の調剤薬局で薬剤師として勤務しています。

私がこの薬局を志望した理由は、各種研修や勉強会が充実しており、また、医療ビル中心の調剤薬局であることから 1 店舗でも複数の科目の処方箋を扱えるため、薬剤師として成長するには最高の環境だと思ったからです。今はまだ店舗に配属されて間もないため、業務の 1 日の流れや事務作業などを教えて頂いているところです。処方箋枚数が多く忙しい店舗ですが、その分多くの患者様に接することができ、やりがいを感じています。これからは、大学生活で学んだ知識を生かし、調剤の技術を高めるだけでなく、常に温かい対応を心がけ、患者様から信頼される薬剤師になれるよう努力していききたいと思います。

当会では、4年に一度総会・懇親会を開催しております。今年はその開催年に当たり、去る3月1日（土）に大阪大学吹田キャンパス内 銀杏会館にて行いました。当日は生憎の天候でしたが、79名の皆様ご参加くださいました。吹田キャンパスでは、現在、薬学部の耐震改修工事を含め、多くの改築・改修工事が進行中ですが、様変わりしつつあるキャンパスをご覧いただく機会ともなったかと思えます。

総会では、まず会長 萬年成泰氏が開会を宣言し、総会に先立って行われた理事会についても報告しました。次いで、幹事長 堤 康央氏が「阪大薬学丸の現状と今後」と題して薬学部の近況報告等を行い、続いて、新任教授のスピーチ、薬友会の活動報告、会則改正の審議等のプログラムを執り

行いました。そして、この度新設された大阪大学薬友会功労賞の贈呈式では、薬友会名誉会長 林 信一氏並びに同最高顧問 近藤雅臣氏に、賞状とトロフィーをお贈りしました。また、優れた若手教員・院生・学部生会員に贈られる大阪大学薬友会賞につきましても、各受賞者をご紹介しました。最後に、副会長 眞弓忠範氏が閉会の辞を述べ、全てのプログラムを滞りなく終えました。

その後、同会館レストラン『ミネルパ』にて、立食形式の懇親会を行いました。終始和やかな雰囲気の下歓談の輪が広がり、皆様にお楽しみいただけたのではないかと思います。

なお、総会・懇親会の詳細につきましては、大阪大学薬友会ウェブサイトに掲載しておりますので、合わせてご覧いただければ幸いです。

総会・懇親会にご参加くださいました皆様、開催に当たってご尽力くださいました皆様に、心より御礼申し上げます。

（庶務担当幹事：藤岡 弘道）



日本薬学会第135年会の開催にあたって

日本薬学会第135年会組織委員長
大阪大学薬学研究科 教授
小林 資正

大阪大学薬学研究科が日本薬学会第135年会を運営することになり、2015年3月25日～28日の4日間、神戸のポートアイランドの会場で開催することになりました。

阪大薬担当での開催は、第124年会のお世話を大阪南港にありますワールドトレードセンターを中心とする施設を使いまして実施させて頂きましてから、11年ぶりのことになります。今回、次年度の第135年会をお世話させて頂くことに決まりまして、前回使わせていただいた施設をチェックしましたところ、維新の会の橋本大阪市長が知事をされておられたときに、府庁の建物として移管されており、学会の会場としては使えなくなっておりました。そこで私達は、また新たな会場を探さないといけなくなりましたが、講演会場をまとめて20以上も確保できて、経費的にもやりくりできる会場を探すことは大変でありました。そんな時に、次の年会を開催させて頂くことになりました神戸学院大学と兵庫医療大学の施設を使わせていただくという案が出て参りました。

ポートアイランドと命名されました神戸の港の沖を埋め立てて作られました人工島には、神戸空港をはじめ、いろいろな企業や公共施設や学術施設が誘致されております。その中の神戸の町を見晴らせる景色の良い海辺の場所に、10年近く前に、神戸学院大学薬学部が移転してこれ、またそのお隣に、兵庫医療大学薬学部が新設されました。この両校はそれぞれ立派な講義室をたくさんお持ちでして、両校の講義室を使わせていただければ、年会開催会場として申し分ないことが分かりました。そこで、両校にお願い致しまして、大阪大学薬学研究科と、神戸学院大学薬学部と、兵庫医療大学薬学部の3大学が共同で第135年会の運営を担当させていただくことになりました次第であります。

年会を開催するにあたりまして、年会毎にテーマと言いますかスローガンを掲げるようになっております。今回の第135年会の場合には、「薬学が拓く、健康と未来」という大きな看板を掲げさせていただきました。創薬から医療に亘る最前線研究の情報発信を通じて安心と安全を担う薬学の発展に寄与することを目的としております。海外や国内招待による特別講演、部会横断的な各種シンポジウムを、口頭発表やポスター発表による一般講演とあわせて行います。

これからしっかり準備を進めて参りますので、薬友会の会員の皆様におかれましても大勢の方々に年会にご参加いただきますようご案内させていただきます。

大阪大学薬友会アワード受賞



功労賞

林 信一 (1期)

卒業して丁度60年。世の中全く変わってしまった。昭和28年4月、町中には80歳の老人は全く見掛なかった。われわれの親達が敗戦の時40台。国民全体が餓死状態。その状態で結核菌に侵されると結核の進行が速く寿命は1年と持たなかった。抗結核剤も簡単には手に入らず。病院でも結核病棟として隔離されていた。お米の配給や、学食での食券が必要で、このシステムが廃止されたのは昭和31年。そんな学生時代に、ドイツ語の中村恒雄先生が“学生時代の友人は生涯の友になる。同窓会には必ず出席しなさい。これに出るのが億劫になり欠席するようになるのは、人生に敗れたようなもの”と教わり薬学部に進むと、当時の主任教授であった川崎近太郎先生が“東大には薬友会と言うのがある。阪大でも作れば。”と声を掛けられ、作ったのが26年の秋。しかし、卒業して10年位は同窓生は若く、食うのに必死。薬友会どころで無かったが1期生が40歳位になり、ぼつぼつ昔の事や同級生の事が気に為り出したので薬友会を再開して今になった。60年間の出来事を振り返れば切りが無いので、今、私個人が阪大でやって欲しい事を一点だけ述べる事にして、お礼の言葉と致します。

薬と毒は同じもの

西欧医学では800年の昔から医薬分業である。これは我が国で考えて居るような生易しいものではない。医師は薬を売れば医師免許を取り上げられ、大学の卒業免許を取り上げられる。薬剤師は薬から病気を作って販売すれば、又、病状が悪化したり副作用が発生したりすれば店を取り上げられ昔は腕を切り落とされた。この文化が800年続いているので医師が薬を扱うとか所持しているとかの発想がない。当然我が国のように一寸薬を貰いに医者に行き来すると言う発想がない。明治の初め、我が国の医学を西欧医学とする、と国会で決めながら当時の医師は東洋医学を学んだ医師しか居なかったのも、薬

だけが西欧医学のものが持ち込まれた。そして医師は薬の効き方と使い方を説明するのが業で漢方医学の形態を踏襲した。

昭和36年国民皆保険になり、医者に行けば1割負担で薬が貰える。このシステムでは薬をチェックするシステムが無く、医者は製薬会社から持ち込まれた無難な薬を使う事に徹して来た。これは新薬の発売に際し臨床研究が行われ、メーカーの目指している部分の有用性の研究が行われ、副作用の発生が無いかが検討するのは当然であるが、副作用の発生する部位の専門医が依頼されて居ないので有用な作用が進んでいるのと同時に副作用も同時に進行している事を考えるべきで、薬と毒を同時に飲んでいるのであるから副作用を極力小さくし有用な部分が発揮出来るような使い方を考える必要がある。

米国では服薬開始後は薬剤師の責任範囲になり、我が国の検査病院に薬剤師が居り、薬の有効性、副作用の発生をチェックしている。

漢方医学から抜け切れていない我が国の人には不思議な習慣に考えられるが、米国の人から見れば薬を貰ってから薬剤師が面倒を見て呉れない国には不安で住み付けない。一刻も早く米国の薬剤師免許を取得した人が米国と同じシステムの病院を持ち、アメリカン ファーマシューティカル ホスピタルを作るべきじゃないか。阪大の卒業の後、アメリカの薬剤師免許を取ってやろうとする人が出て来ないかなと夢んでいます。

更に、我が国も服薬開始後の症状管理の為の病院を設立する必要がある。この為には薬を飲み始めてからの症状の変化を追及する学問を設立必要がある。我が国には服薬開始後の症状の変化が報告されていないし、副作用の軽減するような処置についての報告もない。副作用の報告は独自の臨床報告はあるが、日常的に薬と毒を同時に使用している中での薬の使い方の報文が増えて来る必要がある。これは現体制では医師も製薬会社も財務の利益に反するので協力しない。小生の個人的見解ですが、これこそ阪大薬学部が引き受ける分野では無いのかと考えて居ます。



功労賞

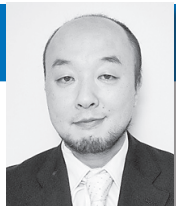
近藤 雅臣 (2期)

この度図らずも功労賞を頂くことになり身に余る光栄です。厚く感謝申し上げます。現在勤務している学校の公式行事の主催者として東京に出張しますので、総会に出席してお礼の言葉を述べる事ができず、文面にて失礼させていただきます。小生が貢献したことは大したことではありませんが、辛うじてひとつ

挙げるとしますと、ひとりでも多く本学出身者を教授に任官させるという道を作ったことでしょうか。小生が本学出身の最初の教授に任官してから10数年を要しました。このためには、故山村雄一総長、同窓の林 信一先生、藤井正美先生、濱 堯夫先生などの影の応援があったからです。務めを果たし退官するとき、私の使命は果たしたので後は皆さんの力で素晴らしい学部にして下さいと申し上げたのを記憶しています。今や教職員の皆さんの力で逞しく成長した学部を頼もしく思っています。益々の発展を祈念しています。有難うございました。

大阪大学薬友会賞受賞

グローバル部門賞



新谷 紀人 (45期)
大阪大学大学院薬学研究科神経薬理学分野
准教授

この度、「脳と脾臓における新規創薬標的の機能評価」という課題で、第一回大阪大学薬友会賞グローバル部門賞を賜りました。あらためまして、薬友会の皆さま方に深く感謝申し上げます。また本研究に関し、多くのご指導・ご協力を頂きました。馬場明道先生、橋本均先生をはじめとする当研究室の諸先輩や学生の皆様、薬学研究科の先生方に深謝致しますと共に、萬年成泰会長をはじめ選考委員の先生方に心より御礼申し上げます。

本課題は、私が神経薬理学分野で一貫して取り組んで参りました神経ペプチド PACAP と、その下流標的としての、II 型プロスタグランジン D2 受容体 CRTH2、ミトコンドリア内膜融合阻害因子 MIFI の研究成果です。CRTH2 は末梢炎症への促進

的機能が知られる分子ですが、当分野の研究から、細菌感染やガン病態時の意欲や認知機能の低下に対して選択的に関わることなど、CRTH2 の中枢機能が初めて示されました。また MIFI は当分野で発見された新規因子ですが、その機能として、ミトコンドリアの品質維持作用や、膵β細胞・神経細胞での保護作用が明らかになりつつあります。これらの成果から、慢性炎症時の気分障害や、糖尿病・神経変性疾患の新たな創薬標的が同定されたと認識しています。

本選考へは、MIFI の作用機構解明とそれに根差した創薬的意義の確立、そしてこれらの研究をグローバルに展開するスキルの修得のため、ミトコンドリアの内膜研究で世界を牽引する Scorrano 研（イタリア・パドヴァ大学）への派遣希望を元に応募を行い、本受賞によって渡航や研究のご支援を頂けることとなりました。ありがとうございます。本学の代表としての意識を明確に、また第一回受賞の期待に応えられるよう、薬学研究科・薬友会の発展にも大きく資する成果を得て参りたいと存じます。薬友会の皆様には、今後とも変わらぬご指導を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

研究部門賞



立花 雅史 (50期)
大阪大学大学院薬学研究科分子生物学分野
助教

この度、「アデノウイルスベクター由来核酸が惹起する生体免疫応答メカニズムの解明」という研究課題で平成 25 年度大阪大学薬友会賞研究部門賞を拝受致しました。何よりもまず、本賞の設立にご賛同いただきました薬友会会員の皆様、ならびに設立に際しましてご尽力いただきました薬学研究科の先生方に厚く御礼申し上げます。また本受賞は、水口裕之教授をはじめとした分子生物学分野の方々とのつながりやご助力がなければ成し得なかったものであり、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

本研究結果では、遺伝子治療用ベクターとして広く用いられているアデノウイルスベクター（Adv）に関しまして、アレルギー治療薬としての Adv の可能性を見出すに至りました。さら

に、Adv のゲノム DNA などのウイルス由来核酸が生体内の核酸センサーを介して自然免疫を活性化するというメカニズムを明らかにしました。また、免疫細胞ではこのメカニズムが機能している一方で、非免疫細胞では別のメカニズムによって自然免疫が活性化されることを証明しました。本成果は Adv のさらなる改良や、近年注目を集めている Adv のワクチンへの応用研究の一助となるものでありますが、まだまだ謎は多く残されているため今後さらなる研究を進めていかねばなりません。

私は学部時代から「免疫学」に興味を持ち、様々な研究室で修行（荒行？）を積んでまいりました。本受賞はこれまでに多くの先生方や諸先輩方から御指導いただき培ってきたものを一つの形にできたものであり、感謝の念に堪えません。それと同時に、自分自身がこれまで以上に粉骨砕身の覚悟で激烈に努力し、5年後あるいは10年後に本賞が「栄えある賞」と認知されるようにその価値を高めていくことこそが、一人目の受賞者としての責務であると感じております。

最後になりましたが、日々温かく見守り、安らぎを与えてくれた家族に感謝します。

奨励賞 (D3)

赤羽 昌明 (薬化)

H26.4.1 以降の所属：Notre Dame University

この度、「シチジン誘導体を含むオリゴヌクレオチドの二重鎖 DNA 認識能に関する研究」で、薬友会賞奨励賞を拝受致しました。

オリゴヌクレオチドは特定の配列を持つ二重鎖 DNA と配列特異的に三重鎖核酸を形成します。これは、ゲノム DNA を標的とした遺伝子発現制御法として応用可能ですが、現状では、三重鎖核酸を形成できる二重鎖 DNA 配列には制約があり、これが実用化への障害となっています。私は、この標的二重鎖 DNA 配列の制約を克服するべく研究に取り組んで参りました。そして、これまで認識が困難であった塩基対の一つである CG 塩基対を厳密に認識できるシチジン誘導体の開発に成功しました。これにより、より広範な二重鎖 DNA 配列を標的とすることが可能となります。今回の受賞は、上述の研究成果を

評価していただいたものであります。私の行った研究が、今後の三重鎖核酸研究の発展、ひいては新たな核酸医薬開発の足がかりとなれば幸いです。

今後私は、米国 Notre Dame University にてポスドクとして働かせて頂きます。この受賞を励みとして、異国の地でより一層精進する所存です。

最後になりますが、本研究は大阪大学薬学研究科生物有機化学分野教授・小比賀聡先生、同准教授・張功幸先生にご指導頂き遂行したものであり、この場をお借りして両先生に厚く御礼申し上げます。また、本研究を遂行するにあたり、ご協力を頂きました生物有機化学分野の皆様にも深く感謝致します。そして、私の研究生活の礎を築いてくださった神戸薬科大学名誉教授・内藤猛章先生をはじめとする同大学薬品化学研究室の先生方および当時のメンバーに感謝致します。また、大学院博士後期課程において経済的援助を賜りました、独立行政法人日本学術振興会に感謝の意を表します。そして、長い学生生活を支えてくれた家族に心より感謝します。

奨励賞 (D3)

伊藤 浩介 (薬化)

H26.4.1 以降の所属：独立行政法人医薬品医療機器総合機構 (PMDA)

この度、以下のような研究について薬友会賞奨励賞として選出いただきましたこと、大変光栄に存じます。このような素晴らしい賞の存在は、博士課程において研究を進める上で大きなモチベーションとなりました。薬友会の皆様に厚く御礼申し上げます。

現在、生物医学や分子生物学において、配列特異的な核酸の検出法は重要な技術となっています。一般に、配列特異的な核酸の検出は、プローブとなるオリゴヌクレオチドと標的となる核酸との配列特異的な二重鎖形成を介して行われますが、標的配列が既に二重鎖を形成している DNA を検出対象とする場合には、検出効率の低下などが課題となることが知られています。私は、ホスホロアミダートを導入したオリゴヌクレオチドが三重鎖又は二重鎖形成依存的に酸加水分解反応されることを応用

し、二重鎖 DNA を配列特異的に検出することが可能な分子ツールの開発研究を行い、一塩基の違いを精度よく識別した上で、高感度に二重鎖 DNA を検出できることを明らかにしました。

本研究は、多くのサポートやご指導のもとに進めることができました。特に、終始御指導、御鞭撻を賜りました生物有機化学分野教授 小比賀 聡先生、本研究の討論に加わり有益な助言及び御指導を頂きました准教授 張 功幸先生、助教 山本剛史先生、名古屋大学大学院創薬科学研究科准教授 児玉哲也先生に深く感謝致します。さらに、本研究の推進に御協力頂きました生物有機化学分野の皆様、経済的サポートを頂きました独立行政法人日本学術振興会に感謝致します。

最後になりましたが、私は現在、厚生労働省の革新的医薬品・医療機器・再生医療製品実用化促進事業における人材交流の一環として独立行政法人医薬品医療機器総合機構にてレギュラトリーサイエンスに関して学ばせていただくとともに、核酸医薬の規制のあり方について議論を進めております。大阪大学薬学部・薬学研究科で学んだ知識や経験を生かして、レギュラトリーサイエンスを盛り上げていければ幸いです。

若手奨励賞 (M2)

叶 拓也 (薬理)

H26.4.1 以降の所属：塩野義製薬株式会社創薬疾患研究所

この度、平成 25 年度修士論文研究発表会におきまして、「プロスタノイド受容体 CRTH2 による認知機能の調節に関する研究」という題目で、薬友会賞若手奨励賞を拝受いたしました。

末梢での炎症免疫系との関連が広く知られる CRTH2 について、当研究室では CRTH2 の遺伝子欠損マウスや拮抗薬を用いて検討し、CRTH2 が炎症時の社会性行動障害など脳高次機能の障害に関わることを明らかにしてきました。本研究より、こ

の CRTH2 がマウスやヒトにおける認知機能の調節に関わる可能性が新たに示されました。

本賞の選考を通じて、自らの研究成果の面白さを多くの方々に評価していただき、同じく素晴らしい研究をされてきた方々と研鑽しあえました。この経験をもとに、今後の研究活動に励んでいきたいと考えている所存です。最後になりましたが、本受賞は大阪大学大学院薬学研究科神経薬理学分野の橋本均先生ならびに新谷紀人先生、そして神経薬理学分野の皆さまのご指導、ご鞭撻を賜ることで成し得たものであり、また、本研究を遂行するにあたり、多大なるご助言、ご協力をいただきました大阪大学大学院医学系研究科精神医学教室の諸先生方をはじめとする、多くの共同研究者の方々に心より感謝申し上げます。

若手奨励賞 (M2)

鎌田 泰正 (製造)

H26.4.1 以降の所属：テバ製薬

このたび、平成 25 年度修士論文研究発表会におきまして、「抗生物質ナピラジオマイシン A1 の全合成研究」という題名にて薬友会若手奨励賞を拝受いたしました。

堀、梅沢らによって単離されたナピラジオマイシン A1 は、放線菌が産生する抗生物質であり、多剤耐性グラム陽性菌に対して強力な育成阻害活性を示すことが知られております。また、ナピラジオマイシン A1 の分子骨格の構成単位には、塩素置換不

斉炭素の他、三置換アルケンやジケトンといった特徴的官能基が含まれており、それらの導入・構築手法の開拓は、有機合成化学の発展という観点から重要な意義を持ちます。本研究では、NCS/Ph₃P 複合塩素化剤によるオレフィンジクロル化の新手法を開発すると共に、本手法によるジクロル化を足掛かりとする立体選択的の四置換炭素構築を経て、ナピラジオマイシン骨格分子のすべての官能基を備えた中間体の獲得に成功しました。

最後になりましたが、本研究にあたりご指導、ご鞭撻を賜りました大阪大学大学院薬学研究科薬品製造化学分野教授 赤井周司先生、同分野准教授 好光健彦先生、同分野助教 井川貴詞先生、ご協力いただきました同分野の皆様感謝いたします。

若手奨励賞 (M2)

続木沙也加 (生化)

H26.4.1 以降の所属：大塚製薬株式会社

この度、「アデノウイルスベクターによる生体免疫応答における TBK1 の機能解明」に関する研究で薬友会若手奨励賞を拝受致しました。

遺伝子治療は難治性疾患に対する革新的治療戦略として大いに期待されており、効果的な遺伝子導入用ベクターの開発が必要とされています。私は安全性の高いベクター開発を目指すべく、アデノウイルスベクターの免疫応答メカニズムの解明を行いま

した。その結果、TBK1 分子を介したシグナル経路の活性化が、アデノウイルスベクターによる生体免疫応答を制御することを見出しました。免疫系は生体においてとても複雑な防御機能を構築しており、期待する結果が得られずに苦しい思いをしたこともありましたが、先生方や先輩・後輩など多くの方々のお力添えのおかげで無事に研究をまとめることができ、この度の受賞により本研究成果が評価されたことを大変嬉しく思っております。この賞を励みとして、より良い薬を世の中に届けることができるよう、今後も精進して参りたいと考えています。

最後になりましたが、本研究を遂行するにあたりご指導を賜りました水口裕之先生、立花雅史先生、ならびに分子生物学分野の皆様心より感謝申し上げます。

若手奨励賞（M2）

林 克彦 （生体）

H26.4.1 以降の所属：大阪大学大学院薬学研究科博士後期課程 1 年

この度、平成 25 年度の薬友会賞若手奨励賞をいただき、この場を借りて暖かくご指導頂きました山口明人教授（現 産業科学研究所特任教授）をはじめとした細胞生物学分野の皆様および産業科学研究所の連携研究分野の皆様に感謝申し上げます。

私は修士での研究テーマとして、グラム陰性菌で抗生物質への多剤耐性に大きく関与する多剤排出タンパク質の阻害剤開発と機能複合体の構造解明に取り組みました。X 線結晶構造解析

と生化学的な分析を通じて、阻害剤の効果を決定する要因を明らかにとし、さらに未解明であった多剤排出タンパク質機能複合体の結合比率を決定することができました。

実験結果を発表する際には論理的に話をすることは必須ですが、修士論文発表にあたってはそれに加えて、自分が研究に感じていた面白さが伝わり、発表で楽しんでいただけるかどうか、を目標の一つとしました。若手奨励賞が少しでも伝えられた結果であれば、個人的に大変嬉しく思います。私は引き続き博士後期課程に進学しますが、この受賞を励みとし、日々努力していこうと思っています。より面白い研究と面白い発表を追求し、その結果として薬学ひいては人類に貢献する事が出来ればと考えています。

若手奨励賞（B6）

吉村 一樹 （微生）

H26.4.1 以降の所属：大阪大学医学部附属病院薬剤部研究生

この度、平成 25 年度長期課題研究発表会におきまして、「神経ペプチド CGRP による脂肪組織炎症の制御機構解明」という題目で、薬友会賞若手奨励賞を拝受いたしました。

CGRP は神経系と免疫系の両方に作用する神経ペプチドであり、神経系に対しては、血管平滑筋弛緩や痛覚伝達、免疫系に対しては、B 細胞からの抗体産生抑制やマクロファージの抗原

提示能抑制などの作用があります。本研究ではこの CGRP が、肥満した脂肪組織における炎症状態を制御する可能性を見出しました。肥満した脂肪組織では、慢性炎症状態になっていることが知られており、この慢性炎症にはマクロファージや T 細胞などの免疫細胞が重要な役割を果たしています。CGRP はこれらの免疫細胞に作用することで、脂肪組織の慢性炎症を制御していると考えられ、メタボリックシンドロームの病態解明における新たなアプローチの一つとなることが期待されます。

最後になりましたが、本研究を遂行するにあたり、ご指導を賜りました辻川先生ならびに細胞生理学分野の皆様に心より御礼申し上げます。

スタートアップ賞（B4）

岡本 涼太 （生化）

H26.4.1 以降の所属：大阪大学大学院薬学研究科博士前期課程 1 年

この度、平成 25 年度卒業研究発表会におきまして、「ヒト iPS 細胞由来肝細胞のマウス腎被膜下への移植」という演題で、薬友会賞スタートアップ賞を拝受いたしました。

ヒト iPS 細胞由来肝細胞を有したキメラマウスは、ヒト初代肝細胞を使用したキメラマウスと比較して、均質性・安定供給など様々な理由から実用化が期待されています。本研究では、基礎的

検討としてヒト iPS 細胞由来肝細胞がマウスの腎被膜下に生着し機能するのかを検討しました。その結果、ヒト iPS 細胞由来肝細胞がマウスの腎被膜下に生着できることを見出しました。今後は本研究成果をもとに、より高い生着効率を示すキメラマウスを作製し、ヒト肝炎ウイルスモデルへの応用を目指します。

最後になりますが、私が受賞できたのは、水口裕之先生をはじめとした諸先生方や、研究室の仲間、および家族の日頃のご指導やご支援のおかげであり、これまで関わって頂いた全ての方々に心より感謝申し上げます。この受賞を励みに、今後も精進していく所存です。

スタートアップ賞（B4）

柏木 悠里 （微生）

H26.4.1 以降の所属：大阪大学大学院薬学研究科博士前期課程 1 年

この度、平成 25 年度卒業研究発表会におきまして、「淡明細胞型腎細胞癌において高発現する miR-122 の機能解析」という研究課題で、大阪大学薬友会賞スタートアップ賞を頂きました。このような賞を頂き大変光栄であるとともに、発表を見守って下さった皆様方に深く感謝しております。

実験には何度も何度も挑戦しましたが、挑戦するたびに失敗の連続で、落ち込むこともありました。しかしながら、研究室の皆様の協力を得て、スライドの準備、発表方法、質疑応答の仕方など、多くの人的ご指導とご助言をいただき、自分なりに毎日改善に努めてきました。この度の賞を受けましたことを胸に、これからもよりいっそう精進し研究に励んでいきたいと思っています。

最後になりますが、終始暖かいご指導、ご鞭撻を賜りました、細胞生理学分野教授 辻川先生、助教 神宮司先生をはじめとする諸先生方ならびに本研究室の皆様方に心より御礼申し上げます。

スタートアップ賞 (B4)

塚田 陽平 (微生物)

H26.4.1 以降の所属：大阪大学大学院薬学研究科博士前期課程 1 年

この度は、平成 25 年度卒業研究発表会におきまして、「AlkB homolog 8 (ABH8) の膀胱癌治療分子標的としての評価」という研究テーマで薬友会賞スタートアップ賞を拝受いたしました。

AlkB homolog 8 (ABH8) は膀胱癌促進的にはたらいており、核酸を基質として修飾を行う機能が推定されている分子で

すが、その機能と膀胱癌の関係性は未解明です。そこで、エピジェネティックな制御と癌の関係性の解明が癌研究の進展の一助となり、癌患者さんの治療に役立てられるように日々精進し研究を続けていきたいと思っています。

最後になりましたが、私が今回受賞できたのも御指導、御鞭撻を賜りました細胞生理学分野教授 辻川和丈先生をはじめとする諸先生方、技術指導や御助言をいただきました細胞生理学分野の皆様ならびに精神面でとても大きな支えとなってくれた家族や友人のおかげであり、心より感謝申し上げます。

スタートアップ賞 (B4)

若林 圭作 (生化)

H26.4.1 以降の所属：大阪大学大学院薬学研究科博士前期課程 1 年

この度、平成 25 年度卒業研究発表会におきまして、「遺伝子 X のノックダウンによるアデノウイルスベクター用パッケージング細胞の改良」という演題で、薬友会賞スタートアップ賞を拝受いたしました。このような素晴らしい賞を頂くことができ、大変嬉しく思っております。

今回は、諸事情により遺伝子 X に関する情報は伏せて発表さ

せて頂きましたが、また機会があれば、遺伝子 X のことも明かして発表したいと思っております。

本研究は、これまでに分子生物学分野の諸先輩方が積み重ねてこられたアデノウイルスに関する研究の成果の上に成り立つものであります。今後は諸先輩方に感謝しつつ、本研究がアデノウイルスの研究のさらなる発展に貢献できるよう、努力していく所存であります

最後になりましたが、本研究を遂行するにあたり、ご指導、ご支援を賜りました水口裕之教授、櫻井文教准教授をはじめとする分子生物学分野の皆様に、心より感謝いたします。

受賞の喜び

「第 10 回日本学術振興会賞」の受賞によせて

大阪大学大学院薬学研究科毒性学分野 教授

堤 康央 (39 期)



平成 25 年 12 月 13 日 (金) に、独立行政法人日本学術振興会より、第 10 回日本学術振興会賞の受賞者の発表があり、分不相応ではありますが、この栄に浴しました。授賞式は平成 26 年 2 月 10 日 (月) に、秋篠宮殿下・同妃殿下のご臨席のもと、日本学士院 (東京都) において行われました。まさに、身に余る光栄であり、ご推薦頂いた先生方に加え、偏に、眞弓忠範先生 (12 期) をはじめとする薬友会の諸先輩方のご指導・ご鞭撻と、研究室の仲間・学生諸氏のご支援の賜と、心より御礼を申し上げます次第です。

日本学術振興会賞は、まだまだ歴史は浅いものの、その趣旨を抜粋致しますと、優れた研究を進めている若手研究者を見出

し、早い段階から顕彰してその研究意欲を高め、独創的・先駆的な研究を支援することにより、我が国の学術研究の水準を世界トップレベルにおいて発展させることを目的に創設されたもので、毎年、人文・社会科学及び自然科学のあらゆる分野にわたる研究者 25 名に授与されることになっております。私の受賞内容は、「蛋白質医療のためのバイオ・ナノ技術と高分子化学を融合した薬物輸送の最適化システムの開発」となります。詳細は、日本学術振興会の HP をご参照頂けましたら幸いです。

本受賞を糧に、さらに薬学研究教育に邁進したいと決意を新たに致しております。今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。



「有機合成化学協会第11回関西支部賞」並びに
「Asian CORE Program (ACP) Lectureship Award, Singapore」を受賞して

大阪大学薬学研究科薬品製造化学分野 准教授

好光 健彦 (特別会員)

このたび、高度官能基化と立体制御の新戦略を基盤とする生物活性天然物の全合成に関する研究により、「有機合成化学協会第11回関西支部賞」並びに「Asian CORE Program (ACP) Lectureship Award, Singapore」を受賞いたしました。また、併せて、大阪大学総長による表彰を受けました。

医薬リードや生物学研究のツールとしての機能性を秘めた生物活性天然物の多くは、高度且つ複雑に官能基化された構造を有しています。従って、その化学合成には、多様な分子構造を望み通りに組み立てるための柔軟な合成手法と戦略の開拓が常に求められます。我々は、ラジカル化学や不斉合成化学に基づく独自の有機合成の新手法・戦略を開発することによって上記

の課題を解決し、抗腫瘍活性アルカロイドや抗生物質、さらには海洋産天然毒など、数々の生物活性天然物の化学合成による人工的獲得に成功しました。また、全合成を基盤とする創薬化学研究を展開し、有望な医薬品候補化合物の創製にも成功いたしました。これらの基礎から応用に至る有機合成化学研究は、創薬はもとより、幅広い機能性物質の創製が求められる物質科学の更なる進展をもたらすものであります。

本研究の推進にあたり、終始温かいご指導ご鞭撻を賜りました本学名誉教授 田中徹明先生に厚く御礼申し上げます。また、熱き思いと卓抜な能力によって、上記の研究を結実に導いてくれたすべてのグループメンバーに心より感謝申し上げます。



「第2回日本神経精神薬理学会学術奨励賞」および「第29回日本薬理学会学術奨励賞」を受賞して

大阪大学大学院薬学研究科薬物治療学分野 助教

吾郷由希夫 (49期)

このたび、「神経精神作用薬標的分子の創薬的意義に関する神経化学的研究」、および「セロトニン_{1A}受容体による中枢神経機能制御に関する薬理学的研究」と題して、それぞれ『第2回日本神経精神薬理学会学術奨励賞』および『第29回日本薬理学会学術奨励賞』を拝受致しました。また併せて、大阪大学総長による表彰を受けました。この場をお借り致しまして、薬友会の皆様にご報告申し上げます。

両賞はともに、神経-神経間相互作用による脳神経ネットワークの体系的解析から見出した中枢神経系作用薬標的分子の薬理学的・創薬的意義に関する研究成果に対するものであります。我々は、抗うつ薬である選択的セロトニン (5-HT) 再取り込み阻害薬 SSRI と抗精神病薬との併用療法の神経化学的基盤として前頭葉ドパミン神経活性化を見出し、本作用に 5-HT_{1A} 受容体活性化とドパミン D_{2/3} 受容体遮断の両作用が関与することを明らかにしました。また、うつ病態等でみられるような血中

神経ステロイド低下状態において、SSRI であるフルボキサミンが、シグマ1受容体と 5-HT_{1A} 受容体の相互作用を介して前頭葉ドパミン遊離を促進することを明らかにしました。これらの発見は、複合標的分子によるドパミン神経系の新しい調節機構を示すものであります。また、発育期環境要因の精神疾患モデルである長期隔離飼育マウスにおいて、マウス間相互作用に応答する異常な神経化学的変化を捉えることに成功しました。本研究で構築した個体間相互作用解析の新しい方法論は、薬物依存や他の精神疾患モデル動物での神経ネットワーク解析に応用可能であり、これらの病態解明や治療薬開発に貢献することが期待されます。

最後になりましたが、研究を遂行するにあたり御指導、御鞭撻を賜りました松田敏夫先生、大阪大学名誉教授 馬場明道先生 (現、兵庫医療大学学長) をはじめとする諸先生方、御協力を頂きました薬物治療学分野の皆様心より感謝申し上げます。



「平成 25 年度日本生薬学会学術貢献賞」、「The 7th Japan-Korea Chemical Biology Symposium, Young Scientist Award」を受賞して

大阪大学大学院薬学研究科天然物化学分野 准教授

荒井 雅吉 (特別会員)

この度、「病態の体内微小環境で機能する活性天然物の探索とその標的分子の解明」という研究課題で平成 25 年度日本生薬学会学術貢献賞を、「Creation of novel drug target for cancer chemotherapy by the study of furospinosulin-1, a hypoxia-selective growth inhibitor against cancer cells」という研究に関して、The 7th Japan-Korea Chemical Biology Symposium, Young Scientist Award を拝受致しましたので、この場をお借りして、薬友会の皆様にご報告申し上げます。

海洋生物や海洋微生物は、人類の想像を遥かに超える多彩な化学構造の低分子化合物を創り出します。またこの構造多様性は、色々な生体内分子を厳密に認識できることを強く示唆することから、海洋由来の活性天然物は、医薬シーズとしてはもちろん、その結合タンパク質の解析を通して、新規薬剤標的分子の開拓や生物の新しい機能を明らかにするケミカルバイオロジー

研究にも利用可能です。

今回の受賞は、病態の悪化や既存薬の薬効低下の原因となる、細胞や病原微生物の病態部位や感染部位での特異な表現型変化に着目し、それら表現型変化を制御する活性天然物を発見するとともに、見出した化合物の結合タンパク質の解析結果が、新規薬剤標的分子の開拓に繋がったことを高く評価して頂いたものです。今後も、医薬シーズとしての活性天然物の探索を基軸に、見出した化合物を利用するケミカルバイオロジー研究を積極的に進め、質の高い研究成果を発信することで、研究科の発展に貢献できればと思っております。

最後になりましたが、本研究を遂行するにあたり、ご指導賜りました天然物化学分野、小林資正教授をはじめとする諸先生、ご協力頂きました学生諸氏に心より感謝申し上げます。



「第 3 回日本免疫毒性学会奨励賞」の受賞によせて

大阪大学大学院薬学研究科毒性学分野 准教授

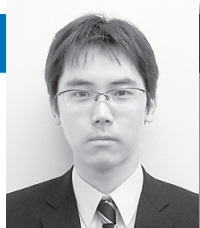
吉岡 靖雄 (47 期)

この度は、薬友会便りに執筆する機会を与えて頂き有難うございます。2013 年 9 月に「ナノマテリアルの安全性確保に資する微粒子の免疫毒性評価」で第 3 回日本免疫毒性学会奨励賞を頂戴いたしました。この場をお借りしまして、薬友会の皆様にご報告申し上げます。

近年、サブミクロンサイズの結晶質シリカやアラムアジュバント、さらには生体内微粒子である尿酸結晶や β アミロイドが、細胞内パターン認識受容体を活性化し、自然免疫応答を誘導することが報告されました。これら報告を契機に、微粒子センサーとも言うべき新たな分子機構が明らかとされ、微粒子の免疫毒性が誘発する病態発症メカニズムの解明に向けた足掛かりができてつつあります。一方で、我が国のナノテクノロジー研究は、開発・実用化の点で世界をリードしており、サブミクロンサイズ (100 nm 以上) の従来素材と比較して、圧倒的に優れた有用機能を有するナノマテリアルが続々と産み出されていま

す。しかし、その安全性評価は未だ十分とはいえず、微粒子の免疫毒性研究の進展も相俟って、より一層の安全性評価・確保が待望されています。本観点から、私は、ナノマテリアルの安全性確保やリスク解析に資するナノ安全科学研究を推進しており、ナノマテリアルの自然免疫・獲得免疫といった免疫機能への影響を評価し、本奨励賞を受賞するに至りました。

この度の受賞において、自らの研究成果を評価していただけたことは、今後の研究活動における大きな活力となりました。今後も更なる飛躍を目指して激烈に努力していく所存でありますので、変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。最後になりましたが、本研究の遂行に際し終始温かいご指導・ご鞭撻を賜りました大阪大学大学院薬学研究科・教授堤 康央先生 (39 期) をはじめとする諸先生方、ならびに多くの共同研究者の方々に心より感謝申し上げます。



「平成 25 年度日本薬学会近畿支部奨励賞」を受賞して

大阪大学大学院薬学研究科毒性学分野 助教
東阪 和馬 (57 期)

この度、「薬学新素材としてのナノマテリアルの生体防御機構に及ぼす影響解析」という研究題目で、平成 25 年度日本薬学会近畿支部奨励賞を拝受致しました。この場をお借り致しまして、薬友会の皆様に受賞のご報告を申し上げます。

近年、ナノテクノロジーを製剤技術に応用し、1 次元が 100 nm 以下の素材であるナノマテリアル (NM) を応用したナノ医薬の開発研究が進展しつつあります。NM は、従来素材と比較し、医薬品素材としての革新的機能を発揮することから、薬学・医学分野において、21 世紀産業の根幹を担う薬学新素材として注目されています。一方で、ナノ医薬の根幹をなす NM の安全性評価研究に関しては、世界的に見ても不十分かつ科学的根拠に乏しいのが現状であり、ナノ医薬の開発が遅れている一つの要因とされています。従って、安全かつ有効なナノ医薬の開発に向けては、NM の物性－動態－安全性の連関評価が必要不可欠です。本観点から我々は、近年、NM の排泄・分解機構における役割が着目されつつある好中球に着目し、NM 投与後

の生体における、好中球が果たす正負の役割について基礎情報の収集を試みました。その結果、遺伝子などの担体としての応用が期待されているナノシリカが、末梢血好中球画分の増加を誘導し、NETs と呼ばれる異物排除に働く機構を誘導する可能性を見出しました。本成果は、ナノシリカが生体防御機構を活性化できる可能性を示すものであり、ナノシリカを用いた新たなナノ医薬への展開につながる重要な知見になり得ると期待できます。現在、本研究をもとに、ナノシリカの生体内動態との連関について追究しており、安全かつ有効なナノ医薬の開発とその支援に資する基盤情報の収集に貢献すべく、研究に励んでいます。

最後になりましたが、本研究を遂行するにあたり、終始温かいご指導、ご鞭撻を賜りました毒性学分野 堤 康央先生 (39 期)をはじめとする諸先生方、並びに、研究にご協力頂きました学生諸氏に心より御礼申し上げます。



「平成 25 年度日本薬学会東海支部学術奨励賞」を受賞して

大阪大学大学院薬学研究科薬品製造化学分野 助教
井川 貴詞 (特別会員)

この度、「フェノール類から多置換芳香族化合物の効率的合成」という研究題目で、平成 25 年度日本薬学会東海支部学術奨励賞を拝受いたしました。私事で大変恐縮ですが、薬友会の皆様に受賞のご挨拶を申し上げます。

多置換芳香族化合物は、多くの医薬品等を構成する基本構造のひとつです。そのため、芳香環に置換基を導入する方法論の開発が古くから研究され、膨大な数の方法が創出されてきました。しかし、ベンゼン環の隣接する 2 つの位置 (オルト位) に同時に異なる置換基を位置選択的に導入する方法は未だ十分とは言えません。私は、多様なフェノール類が容易に入手できることに着目し、その水酸基の活性化を鍵とする新規な方法論の開発研究を推進してきた結果、以下に示す 3 つの成果を得ることができました。①フェノール類から発生させたシリルベンザインと置換フラン類との Diels-Alder 反応が位置選択的に進行することを見出し、檜山カップリング反応と組合せて、ベンゼン環上の隣接する 3 つの位置へ置換基を導入する新手法の開発に成功した。ま

た、アミン類がシリルベンザインのオルト位へ位置選択的に求核付加することを見出し、2-シリルアニリン誘導体の新合成法を開発した。②フェノール類からのボリルベンザインの発生、ならびに置換フラン類との位置選択的 Diels-Alder 反応に初めて成功し、有機合成において極めて有用な多置換芳香族ホウ素化合物の全く新しい合成法を創出した。③ Nonafluorobutanesulfonyl fluoride (NfF) を用いるフェノール性水酸基の one-pot 活性化法を見出し、ベンザインの新発生活法及び Pd 触媒を用いた one-pot クロスカップリング反応へと展開した。

今後、上記の多環式芳香族化合物の位置選択的合成法を利用して、生物活性物質及びその誘導体の合成を行い、創薬研究への展開を図りたいと考えています。最後になりましたが、本研究は薬品製造化学分野 赤井周司先生のご指導および学生の日々の努力によって成し得たものであり、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

受賞者紹介

他の受賞について紹介させていただきます

中川 晋作	特別会員	大阪大学大学院薬学研究科 教授
受賞の名称	第2回大阪大学総長顕彰（研究部門）	
受賞日	平成25年8月2日	

櫻井 文教	特別会員	大阪大学大学院薬学研究科 准教授
受賞の名称	第2回大阪大学総長奨励賞（研究部門）	
受賞日	平成25年8月2日	

赤井 周司	30期生	大阪大学大学院薬学研究科 教授
学会名	日本学術振興会	
課題名	特別研究員等審査会専門委員（書面担当）	
受賞の名称	有意義な審査を行った特別研究員等審査会専門委員（書面担当）の表彰	
受賞日	平成25年7月31日	

辻川 和丈	30期生	大阪大学大学院薬学研究科 教授
受賞の名称	第2回大阪大学総長顕彰（研究部門）	
受賞日	平成25年8月2日	

小比賀 聡	38期生	大阪大学大学院薬学研究科 教授
受賞の名称	第2回大阪大学総長顕彰（研究部門）	
受賞日	平成25年8月2日	

堤 康央	39期生	大阪大学大学院薬学研究科 教授
受賞の名称	第2回大阪大学総長顕彰（研究部門）	
受賞日	平成25年8月2日	

水口 裕之	39期生	大阪大学大学院薬学研究科 教授
受賞の名称	第2回大阪大学総長顕彰（研究部門）	
受賞日	平成25年8月2日	
学会名	臨床薬理研究振興財団	
課題名	ヒトES/iPS細胞由来成熟肝細胞の創出と薬物誘発性肝障害予測への応用	
受賞の名称	第6回臨床薬理研究振興財団研究大賞	
受賞日	平成25年11月5日	

近藤 昌夫	42期生	大阪大学大学院薬学研究科 准教授
受賞の名称	第2回大阪大学総長顕彰（研究部門）	
受賞日	平成25年8月2日	

張 功幸	45期生	大阪大学大学院薬学研究科 准教授
受賞の名称	第2回大阪大学総長奨励賞（研究部門）	
受賞日	平成25年8月2日	

古徳 直之	46期生	大阪大学大学院薬学研究科 助教
受賞の名称	第5回大阪大学総長による表彰	
受賞日	平成25年6月17日	

吉岡 靖雄	47期生	大阪大学大学院薬学研究科 准教授
受賞の名称	第2回大阪大学総長奨励賞（研究部門）	
受賞日	平成25年8月2日	

土肥 寿文	院48期生	立命館大学薬学部 准教授
学会名	万有生命科学振興国際交流財団	
課題名	超原子価ヨウ素種を触媒とする新規合成法の開発	
受賞の名称	Banyu Chemist Award (BCA) 2013	
受賞日	平成25年11月9日	

立花 雅史	50期生	大阪大学大学院薬学研究科 助教
受賞の名称	第2回大阪大学総長奨励賞（研究部門）	
受賞日	平成25年8月2日	

一條 知昭	51期生	大阪大学大学院薬学研究科 助教
受賞の名称	第2回大阪大学総長奨励賞（研究部門）	
受賞日	平成25年8月2日	

村井 健一	51期生	大阪大学大学院薬学研究科 助教
受賞の名称	第2回大阪大学総長奨励賞（研究部門）	
受賞日	平成25年8月2日	

清水かほり	院56期生	大阪大学大学院薬学部 助教
学会名	American Society of Gene & Cell Therapy 16th Annual Meeting	
課題名	Suppression of the Leaky Expression of Adenovirus Genes Following Transduction with a Replication-Incompetent Adenovirus Vector by Incorporating microRNA-Targeted Sequences into the 3'-Untranslated Region of the E2A, E4, or pIX Gene	
受賞の名称	Travel Grant Award	
受賞日	平成25年5月18日	

荻本 千鶴	院56期生	大阪大学大学院薬学研究科 特任助教
学会名	4th Molecular Cardiovascular Conference II	
課題名	Pleiotropic Effects of Angiotensin II Receptor Signaling in Repair and Regeneration of Skeletal Muscle	
受賞の名称	Best Featured Poster Session Award	
受賞日	平成25年9月7日	
学会名	脳心血管抗加齢研究会 2013	
課題名	骨格筋の修復と再生におけるアンジオテンシン II 受容体シグナルの多面的役割	
受賞の名称	優秀演題賞	
受賞日	平成25年12月14日	

河内 崇志	56期生	大阪大学大学院薬学研究科 特任研究員
学会名	第55回天然有機化合物討論会	
課題名	低酸素環境選択的がん細胞増殖阻害物質 furospinosulin-1 の標的分子の解明	
受賞の名称	奨励賞	
受賞日	平成25年11月21日	

東阪 和馬	57期生	大阪大学大学院薬学研究科 助教
学会名	Personalized Medicine-2013	
課題名	Fullerenol C60 as a new therapeutic nanomedicine for inflammatory bowel disease	
受賞の名称	Best Poster Award	
受賞日	平成25年8月6日	

平井 敏郎	58期生	大阪大学大学院薬学研究科 博士後期課程3年
学会名	第60回日本生化学会近畿支部例会	
課題名	微粒子に対する生体応答2—非晶質ナノシリカによる経皮アレルギー感作促進作用—	
受賞の名称	優秀発表賞	
受賞日	平成25年5月18日	
学会名	第40回日本毒性学会学術年会	
課題名	ナノ微粒子と抗原との相互作用は経皮曝露を介して未知のアレルギー反応を促進する	
受賞の名称	優秀発表賞	
受賞日	平成25年6月17日	
学会名	日本薬学会第134年会	
課題名	ナノシリカ粒子とアレルギーの共皮膚曝露はIgGの抑制作用を介してIgE性の経皮感作を促進する	
受賞の名称	優秀発表賞	
受賞日	平成26年3月31日	

廣部 祥子	58期生	大阪大学大学院薬学研究科 助教
学会名	日本薬剤学会第28年会	
課題名	臨床研究におけるインフルエンザ経皮ワクチン製剤の免疫誘導特性に関する解析	
受賞の名称	最優秀発表者賞	
受賞日	平成25年5月24日	

高山 和雄	58期生	大阪大学大学院薬学研究科 博士後期課程3年
学会名	第7回武田科学振興財団薬科学シンポジウム	
課題名	Generation of long-term expandable hepatoblasts differentiated from human iPS cells enables large-scale preparation of hepatocytes for drug discovery and development	
受賞の名称	Excellent Poster Award	
受賞日	平成26年1月18日	

大垣恵理華 院 59 期生 大塚製薬(株) 徳島研究所
学会名 日本薬学会第 134 年会
課題名 T 細胞医薬の最適化を目指した人工キメラ抗原受容体の細胞内ドメイン改変と機能解析
受賞の名称 優秀発表賞
受賞日 平成 26 年 3 月 31 日

早石 知浩 院 60 期生 佐藤製薬
学会名 トキシシンシンポジウム
課題名 ウエルシュ菌イオタ毒素を用いた tricellular tight junction 制御法の開発
受賞の名称 トキシシンシンポジウム奨励賞
受賞日 平成 25 年 7 月 19 日

井上 希 60 期生 京都薬品工業株式会社
学会名 第 63 回日本薬学会近畿支部総会・大会
課題名 粘着集菌シートを用いた細菌の on-site モニタリング
受賞の名称 ポスター賞
受賞日 平成 25 年 10 月 12 日

大塚 梨沙 60 期生 P&W ソリューションズ株式会社
学会名 Asian Federation for Pharmaceutical Sciences 2013
課題名 Development of a novel therapeutic approach using a retinoic acid-loaded microneedle patch for seborrheic keratosis treatment
受賞の名称 Best Poster Award
受賞日 平成 25 年 11 月 22 日

杉山 公二 院 61 期生 大阪大学大学院薬学研究科 博士後期課程 2 年
学会名 第 8 回集積型有機合成国際シンポジウム (ISIS-8)
課題名 A highly integrated asymmetric synthesis by one-pot sequential dynamic kinetic resolution/intramolecular Diels-Alder reaction
受賞の名称 ポスター賞
受賞日 平成 25 年 12 月 1 日

草深 穂高 61 期生 大阪大学大学院薬学研究科 博士前期課程 2 年
学会名 日本薬剤学会第 28 年会
課題名 腫瘍特異的キメラ抗原受容体の創製と T 細胞における発現機能解析
受賞の名称 日本薬剤学会永井財団大学院学生スカラシップ
受賞日 平成 25 年 5 月 24 日

井上 直紀 61 期生 大阪大学大学院薬学研究科 博士前期課程 2 年
学会名 次世代を担う創薬・医療薬理シンポジウム 2013
課題名 ライプイメージングによるミトコンドリア形態制御因子 MIFI の作用機構解析
受賞の名称 優秀発表賞
受賞日 平成 25 年 8 月 31 日

西山 早紀 61 期生 大阪大学薬学部薬学科 6 年
学会名 第 63 回日本薬学会近畿支部大会
課題名 精神疾患モデルマウスにおけるエンカウンター刺激による前頭葉モノアミン神経変化と行動異常発現への AMPA 受容体の関与
受賞の名称 ポスター賞
受賞日 平成 25 年 10 月 12 日

山川 真希 61 期生 大阪大学大学院薬学研究科 博士前期課程 2 年
学会名 第 43 回複素環化学討論会
課題名 分子内ヨードエーテル化反応を用いる bis- 及び fused-THF 骨格の立体選択的構築法の開発
受賞の名称 最優秀ポスター賞
受賞日 平成 25 年 10 月 17 日

清水 望美 62 期生 大阪大学薬学部 5 年
学会名 第 63 回日本薬学会近畿支部大会
課題名 不斉ハロラクトン化反応：アレンカルボン酸化合物での検討
受賞の名称 ポスター賞
受賞日 平成 25 年 10 月 12 日

平成 25 年度薬学部創立 50 周年記念国際化推進事業 「大学院生海外派遣」採択者一覧

※辞退、インフルエンザによる渡航中止除く

辻 啓樹 薬学科 5 年
目的：アリゾナ大学及びアリゾナ大学附属病院にて国際共同研究のための情報収集を行うとともに、最新の教育プログラムに参加する
派遣期間：H25.2.3 ～ H25.2.7
派遣先：アメリカ

國津 侑貴 薬学科 5 年
目的：アリゾナ大学及びアリゾナ大学附属病院にて国際共同研究のための情報収集を行うとともに、最新の教育プログラムに参加する
派遣期間：H25.2.3 ～ H25.2.7
派遣先：アメリカ

榊原 康介 薬学科 5 年
目的：アリゾナ大学及びアリゾナ大学附属病院にて国際共同研究のための情報収集を行うとともに、最新の教育プログラムに参加する
派遣期間：H25.2.3 ～ H25.2.7
派遣先：アメリカ

長基 康人 博士後期課程 1 年
目的：International Society for Stem Cell Research 11th Annual Meeting にてポスター発表を行う
会議期間：H25.6.12 ～ H25.6.15
派遣先：アメリカ

高山 和雄 博士後期課程 2 年
目的：International Society for Stem Cell Research 11th Annual Meeting にてポスター発表を行う
会議期間：H25.6.12 ～ H25.6.15
派遣先：アメリカ

数本 千鶴 博士後期課程 3 年
目的：1) 第 30 回 ISHR 日本部会総会、2) ISHR World Congressm にてポスター発表を行う
会議期間：H25.6.29 ～ H25.7.4
派遣先：アメリカ

東 信太郎 博士後期課程 3 年
目的：The 11th International Symposium on VIP, PACAP and Related Peptides にてポスター発表を行う
会議期間：H25.8.27 ～ H25.8.31
派遣先：ハンガリー

久保 輝佳 博士前期課程 2 年
目的：第 73 回国際薬剤師・薬学連合国際会議にてポスター発表を行う
会議期間：H25.8.31 ～ H25.9.5
派遣先：アイルランド

小栗 一輝 博士課程 1 年
目的：41st International Congress for the History of Pharmacy にてポスター発表を行う
会議期間：H25.9.10 ～ H25.9.14
派遣先：フランス

山本 奈那 博士前期課程 1 年
目的：Harvard Medical School 及び Beth Israel Deaconess Medical Center において敗血症研究の権威である Aird 教授との共同研究を行う
派遣期間：H25.10.2 ～ H25.12.1
派遣先：アメリカ

上村 成章 薬科学科 4 年

目的：米国サンフランシスコ周辺、シリコンバレー、モントレーにて
大学訪問、研修、レクチャー受講、ディスカッション、企業訪
問を行う

派遣期間：H25.10.24 ~ H25.11.2

派遣先：アメリカ

狭間 敬佑 博士後期課程 3 年

目的：Neuroscience2013 にてポスター発表を行う

会議期間：H25.11.9 ~ H25.11.13

派遣先：アメリカ

原 雄大 博士後期課程 1 年

目的：Neuroscience2013 にてポスター発表を行う

会議期間：H25.11.9 ~ H25.11.13

派遣先：アメリカ

平松 直樹 博士後期課程 2 年

目的：Neuroscience2013 にてポスター発表を行う

会議期間：H25.11.9 ~ H25.11.13

派遣先：アメリカ

山崎 淳史 博士後期課程 3 年

目的：Neuroscience2013 にてポスター発表を行う

会議期間：H25.11.9 ~ H25.11.13

派遣先：アメリカ

熊谷 渉平 博士後期課程 1 年

目的：American Heart Association にてポスター発表を行う

会議期間：H25.11.16 ~ H25.11.20

派遣先：アメリカ

大塚 梨沙 薬学科 6 年

目的：Asian Federation of Pharmaceutical Sciences 2013 にてポ
スター発表を行う

会議期間：H25.11.20 ~ H25.11.22

派遣先：韓国

飯田 愛未 博士前期課程 1 年

目的：IBC's 24th Annual Antibody Engineering & Therapeutics にて
ポスター発表を行う

会議期間：H25.12.8 ~ H25.12.12

派遣先：アメリカ

長瀬翔太郎 博士前期課程 2 年

目的：IBC's 24th Annual Antibody Engineering & Therapeutics にて
ポスター発表を行う

会議期間：H25.12.8 ~ H25.12.12

派遣先：アメリカ

寄付および終身会費納入者一覧

薬友会では 48 期生以降については終身会費制*をとっていますが、それ以前の卒業生には、会費に代わってご寄付をいただくことにしております。下記の一覧は 2013 年 5 月 1 日より 2014 年 4 月 30 日の間に終身会費とご寄付をいただいた方です。ご寄付いただいた会員諸兄姉にお礼申し上げますと共に、引き続き広くご協力をお願いいたします。なお寄付は 1 口 5,000 円とし、同封の振込用紙でお送り下さいますようお願いいたします。また、終身会費をこれまで支払われていない方は、この機会に是非お納めください。

※終身会費は、48 期生（2000 年の春に学部卒業または大学院入学）以降の会員に、入会時にお支払い頂いております。

終身会費納入者

西野加奈子 (51)	寶谷 拓磨 (62)	今枝 啓輔 (66)	豊田 麻人 (66)	山田 凌也 (66)	高橋 亮 (院 52)
塚本 晴之 (53)	堀場 昌彦 (62)	衣斐 勇人 (66)	鳥巢 哲夫 (66)	山本 彩葉 (66)	八木悠理子 (院 52)
若林 雅人 (53)	玉置 杏那 (63)	王 鼎 (66)	橋本 洋佑 (66)	山本 果奈 (66)	高橋 理恵 (院 53)
松尾 玲男 (59)	小垣 考弘 (64)	大石菜由子 (66)	服部 功 (66)	和田 祐希 (66)	阿部 直美 (院 54)
井上 敦史 (60)	井阪 亮 (65)	岡田 桃子 (66)	福田 昭平 (66)	有澤 光弘 (院 44)	岡田 英孝 (院 56)
今泉 務 (62)	大仲 萌加 (65)	川崎 太寛 (66)	藤本 淳暉 (66)	中 芳治 (院 48)	数本 千鶴 (院 56)
上村 成章 (62)	野形 真樹 (65)	川瀬 裕貴 (66)	船田 圭亮 (66)	横谷 麻衣 (院 49)	番匠谷研吾 (院 58)
鍵村 直樹 (62)	藤井 茜 (65)	木村 康人 (66)	堀 加奈子 (66)	尾崎 朋久 (院 49)	赤羽 昌明 (院 57)
川東 祐美 (62)	赤嶺 寛樹 (66)	木本 瑞基 (66)	前北 光 (66)	川島 一剛 (院 50)	延東 大輔 (院 60)
角居 雄太 (62)	池上 珠未 (66)	小西 博亮 (66)	三浦 瞳 (66)	柴田 寛子 (院 50)	山下 真代 (院 60)
難波 佑貴 (62)	井筒 功真 (66)	近藤研太郎 (66)	村山 真人 (66)	山口 卓男 (院 51)	神谷謙太郎 (院 61)
畑 智幸 (62)	井上 亜耶 (66)	佐藤 寛真 (66)	室賀 優希 (66)	沖津 貴志 (院 52)	塙 守史 (院 61)
林 俊明 (62)	今枝 厚貴 (66)	鈴木 伸敏 (66)	森本 健揮 (66)	河原 一樹 (院 52)	森原 啓文 (院 61)

寄付納入者

宇治 昭 (1)	紀氏 健雄 (9)	眞弓 邦子 (12)	北川 善啓 (18)	宮本 武文 (36)	竹内 由和 (院 12)
畑田 昭雄 (1)	杉本 和 (9)	眞弓 忠範 (12)	西田 春昭 (20)	小比賀 聡 (38)	野田 弘子 (院 14)
金田 方子 (2)	瀬戸 義子 (9)	川田 敏子 (13)	米田眞理子 (20)	小比賀浩子 (39)	鍋島 俊隆 (院 16)
近藤 雅臣 (2)	武知ハルミ (9)	南 登代子 (13)	垣内 信子 (22)	堤 康央 (39)	春田 純一 (院 23)
濱 堯夫 (2)	中西 勤 (9)	今田 澄 (14)	平松 薫 (23)	水口 裕之 (39)	岩崎 宏樹 (院 50)
佐々木清司 (5)	永野 和子 (9)	中西 信子 (14)	藤岡 弘道 (23)	角田 慎一 (42)	長野 一也 (院 53)
奥田 陽子 (6)	成戸 俊介 (9)	山路 昭 (14)	八木 清仁 (24)	鎌田 春彦 (43)	北尾 達哉 (院 54)
小花 常子 (6)	西村 豊子 (9)	今西 武 (15)	渡辺 邦子 (26)	新谷 紀人 (45)	大久保忠恭 (特別)
山本 和子 (6)	藤井 悦子 (9)	長町真砂子 (15)	植田 淳子 (29)	池尻 昌宏 (46)	櫻井 文教 (特別)
西島 真森 (7)	萬年 成泰 (9)	服部 征雄 (15)	赤井 周司 (30)	吉岡 靖雄 (47)	中川 晋作 (特別)
原田 明子 (7)	森田 茂 (9)	青山 清美 (16)	小林 弘武 (30)	立花 雅史 (50)	中山 博之 (特別)
川端 常樹 (8)	川路 晴子 (10)	岡上伊都子 (16)	白馬まゆみ (32)	向 洋平 (50)	橋本 均 (特別)
北山右一郎 (8)	篠田 純男 (10)	恩地 亨輔 (16)	矢倉 隆之 (32)	中村 茂生 (51)	
谷藤 正明 (8)	池上 幸江 (11)	鶴田 康則 (16)	山田 雅巳 (32)	西野加奈子 (51)	
延原 好文 (8)	植木 久一 (11)	藤田日出子 (16)	栗原 晶子 (34)	東阪 和馬 (57)	
服部 弘子 (8)	澤井 弘行 (11)	植木 明廣 (17)	矢倉 尚美 (34)	溝口 正 (院 6)	
門河 浩子 (9)	吉田 紀子 (11)	吉田 和子 (17)	木村 剛 (35)	木村 孟淳 (院 8)	

平成26年度大阪大学薬学部卒後研修会のご案内

主題：講義と症例検討で学ぶ最新治療

回	日程	題名（薬物治療の最前線）	講師
1	6/28（土）	緩和薬物治療の最前線	市立芦屋病院薬剤部長 岡本 禎晃 先生
2	7/26（土）	症例検討（緩和症例への対応）	市立芦屋病院薬剤部長 岡本 禎晃 先生
3	8/30（土）	糖尿病薬物治療の最前線	市立堺病院 藤澤 智巳 先生
4	9/27（土）	症例検討（糖尿病症例への対応）	大阪大学大学院薬学研究科附属実践薬学教育研究センター 医療薬学教育研究ユニット 上島 悦子 先生
5	10/25（土）	抗凝固療法の前線	大阪大学大学院医学系研究科先進心血管治療学 奥山 裕司 先生
6	11/29（土）	症例検討（抗凝固療法症例への対応）	大阪大学大学院薬学研究科附属実践薬学教育研究センター 医療薬学教育研究ユニット 上島 悦子 先生
7	1/24（土）	アレルギー疾患治療の前線	大阪大学医学系研究科抗体医薬臨床応用学講座 田中 敏郎 先生

講演時間 第1, 3, 5, 7回 13:30～15:30 通常のレクチャー 90分 + 質疑 30分
第2, 4, 6回 13:30～16:30 小レクチャー 40分 + グループに分かれて症例検討 90分 + 総合討論 50分

会 場 大阪大学中之島センター（<http://www.onc.osaka-u.ac.jp>）
第1, 2, 5, 6回 304号室
第3, 4, 7回 703号室
大阪市北区中之島4丁目3番53（旧医学部跡地、Tel: 06-6444-2100）
※尚、都合により会場が変更になる場合があります。必ず、下記の大阪大学薬友会ホームページにてご確認の上、ご参集下さい。

参 加 費 無料（参加申込み不要 直接会場までお越しください）

主 催 大阪大学薬友会

問合せ先 北澤恵子まで（Tel: 090-4301-7291）
*日本薬剤師研修センター認定集合研修 1単位（第1, 3, 5, 7回）、2単位（第2, 4, 6回）
*大阪府薬剤師会薬剤師生涯教育認定研修（認定ご希望の場合は新薬剤師章をご持参下さい）
大阪大学薬友会ホームページ
<http://www.phs.osaka-u.ac.jp/homepage/yaku/>

平成26年度薬学部および薬学研究科学生在籍数（平成26年4月1日現在）

薬学部

	定員	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	計
薬学科	25	29	25	29	22	26	26	157
薬科学科	55	60	59	68	62			249
計	80	89	84	97	84	26	26	406

薬学研究科

	修士課程（博士前期）				博士課程（博士後期）				
	定員	1年生	2年生	計	定員	1年生	2年生	3年生	4年生
創成薬学専攻	75	73	71	144	20	22	19	20	61
医療薬学専攻					10	0	9	4	0
分子薬科学専攻					10 (募集停止)	0	0	2	2
応用医療薬科学専攻					14 (募集停止)	0	0	2	2
生命情報環境科学専攻					8 (募集停止)	0	0	1	1
計		73	71	144		22	28	29	79

研究生	
学部	大学院
3	5

薬友会役員名簿

会 長	萬年成泰(9)
副 会 長	鶴田康則(16) 馬場明道(17) 北澤恵子(17) 西川 修(21) 戸谷治雅(23)
理 事	大杉義征(15) 鍋島俊隆(16) 植木明廣(17) 佐伯とも子(18) 向井睦子(18) 岡部 勝(19) 山村倫子(20) 米田眞理子(20) 河合裕一(22) 春田純一(23) 八木清仁(24) 糟谷史代(25) 池淵佐知子(27) 池田かおり(32) 広川美穂(35) 宇都口直樹(38) 鈴木信孝(39) 南 敬(41) 紀平哲也(41) 角田慎一(42) 鎌田春彦(43) 形山和史(47)
幹 事 長	堤 康史(39)
幹 事	大阪大学薬学研究科・薬学部全専任教授 庶務担当：赤井周司(30) 広報担当：中川晋作(特) 会計担当：橋本 均(特) 名簿担当：小比賀聡(38)
監 事	森岡茂夫(17)
監 事	藤岡弘道(23)
名 誉 会 長	林 信一(1)
最 高 顧 問	近藤雅臣(2)
名 誉 顧 問	眞弓忠範(12)
名 誉 理 事	濱 堯夫(2) 抱 忠男(2) 藤井正美(2) 松本光雄(2) 岩田宙造(6) 奥田順三(9) 西原 力(12) 田中慶一(13) 山下治夫(12)

() 内の数字は期数

平成25年度 卒業生の進路

	卒業生総数	進学	企業	病院	官公庁	その他
薬科学科	56	53	1	0	0	2
薬 学 科	24	0	11	7	4	2
博士前期	69	12	52	0	2	3
博士後期	14	0	6	0	7	1

薬友会だよりに掲載したい原稿がございましたら、中川晋作（e-mail: nakagawa@phs.osaka-u.ac.jp）までお送りください。